

コナン・ドイル『霧の国』の メモ

takaidos

コナン・ドイル(1859-1930)。
1925年(66歳)発行。

龍口直太郎・訳。
1971年発行。

ヴェルヌが科学よりだったのに対して、ドイルの方は人間により興味を持っていたと感じられる。
登場人物の弁舌の巧みさや演説シーン、対話シーンはドイルの方が面白い。

スピリチュアリズム(心霊術。死後も魂は生き続けるという信仰)を当初、チャレンジャー教授もマローンもイーニッドもロクストン卿も信じなかったが交霊会に参加して次第に信じるようになり、最後にチャレンジャー教授も驚くべき現象を目の当たりにして回心して行く。

『失われた世界』のときは恐竜が今も生きている事を証明しようとしてはるばるアマゾンの秘境に行き帰って来たチャレンジャー教授一行が、今度は心霊研究者の用意した土俵に乗って信じさせられてしまった、という話。

著者自身が28歳の時に興味を持ち、交霊会に参加しているうちに信じて入会し、1917年58歳から世界各地を心霊術の講演旅行をして周り、3冊の自伝・心霊研究に関する本を書き上げた。
産業革命を経て飛行機、飛行船、核分裂の理論、粒子加速器の開発など科学が飛躍的に進歩して行った時代だったが庶民の間では心霊術が流行り、医学、SF、推理小説、歴史小説、政治活動(保守右翼)を経て来た著者も晩年はスピリチュアルの方に大きく傾倒して行ったようだ。

心霊術研究者の用意した会場でキャビネットとカーテンを用意し、交霊中は出席者の皆さんには「危険も伴うのでむやみに席を立たないようにして」と注意して部屋を暗くして、霊媒が心霊を呼び出し憑依されて話したり、心霊体(エクトプラズム)を実体化させるという如何にもな交霊会が各地で催された。

最初の交霊会で、霊界のメッセンジャーを自称するミロマーが「神が与えてくれた贈り物が無視されたので裁きの鉄槌がくだされ、若者が一千万人死んだ。」という。

(→第一次世界大戦やスペイン風邪を指すのか?)

諸外国や教会の退廃について語り「その罰はやがて訪れるでしょう

。物質的には進歩したが精神の進歩は滞ってしまった。時間的猶予のあるうちに自己を変革する必要があります。悔い改めなさい、時は近付けり。」と講演の場で話す。

それに対して主人公マローンは「きちがいじゃないかな。」と呟く。

→ドイルは心霊術に対する一般の人の反応をマローンやチャレンジャーに演じさせ、マローンは新聞記者として公平さを保とうとしつつ、ついには心霊の存在を確信して記事を公表し、いまだに信じない一般の人たちに批判されるようになる。

ドイルは結局、空想科学小説用に生み出した登場人物をオカルトに転向させてしまう。

本作の中心人物は、当初心霊術を信じないマローン、宗教改革者アルジャン・メイリー、牧師チャールズ・メイソン、伝道師ミロマー、心霊術研究者ジェームズ・スミス、霊媒師トム・リンデン、そしてチャレンジャー教授の娘イーニッド。

最後のチャレンジャー教授の亡妻と彼が医師時代の患者の霊のメッセージだが、亡妻のドア・ノックの仕方は娘のイーニッドは当然知っているだろうし、2人の患者の名前もチャレンジャーが医師時代の話(教授が担当の患者2名が”同時”に死んだ)を知っていれば調査して語れるだろう話。

ドイルは心霊術研究の成果を死ぬ前に発表できて良かったと語った。

戦争で息子や弟とその甥たちを失ったことも影響しているのか？
登場人物の対話などは面白かったが、結末は残念。

人間の生き方や科学のあり方に道徳を呼びかけるのはいいが、その理由として荒唐無稽な天界だとか神とか霊の存在を定義して、検証方法(その解釈や呼び出す方法のルール)までを制限して信じさせようしたり、「世界はもう滅ぶ」という不安を煽る文句で注目を得て入信させる手口・布教活動は不快。

科学では分からない未知の領域があると思うのなら、公開の場で再現性のある科学的手法で研究・証明して行くべき。

★★★☆☆

<目次>

1. 特使の出発
2. 奇妙な集まりの夕べ
3. チャレンジャー教授の見解
4. ハマー・スミスでの奇怪な出来事
5. 驚くべき経験

6. 悪名高き犯人の私生活
7. 犯人当然の報いを受ける
8. 三人の観察者迷える魂に会う。
9. 心霊現象の最たるもの
10. 深淵より
11. 悪運つきたサイラス・リンデン
12. 高度の体験
13. チャレンジャー教授の挑戦
14. チャレンジャー教授とふしぎな仲間との出会い
15. 偉大な獲物にしかけられた罠
16. チャレンジャー、一生に一度の経験
17. 霧は晴れる

訳者あとがき

<登場人物>

ジョージ・エドワード・チャレンジャー教授:有名な動物学者、アマゾン探検隊長。気難しすぎて一切妥協せず周りは敵ばかり。凶暴だが奥さんには弱い。風貌は大柄で猿人に似ている。ワイスマン学説、進化論。1863年生まれ。62歳?★

サマリー教授:比較解剖学、チャレンジャー教授のライバルだが、アマゾン探検に行って恐竜の存在を確かめる。細身、痩せている。80歳くらいで死去?

ジョン・ロクストン卿:世界的な探検家、61歳。以前南米に来たとき奴隷を酷使する監督(混血スペイン系)ペドロ・ロペスに宣戦布告して殺害した。軍隊経験者でフェンシング、ボクシング、射撃が得意。★

エドワード・マローン:『デイリー・ギャゼット』紙の記者、アイルランド人、38歳。★

イーニッド・チャレンジャー:チャレンジャー教授のひとり娘。Enid。黒髪、青い目。★

アトキンソン博士:聖メアリー病院に外科医。年齢不詳(前作『毒ガス帯』1915年設定では産まれていなかった。最高で11歳のはずだが…)。

ジェームズ・スミス:心霊術研究者。2人の息子を戦争で失った。★

ジェームズ・ボルソヴァー:ハマースミスの食料品商。心霊教会会長

。太っている。★

デブズ夫人:リヴァプールの千里眼。

ハーディー・ウィリアムズ:心霊教会の若い秘書。背が高い。建築基金集めの名人。

ピーブル:心霊教会で議事進行。

マンロー:オーストラリアから来た心霊術師。支配霊アトランティスから来たアラシャを呼ぶ

ジェームズ・ジョーンズ:心霊教会講演の座長。果断で小柄。North Walesから来た。

ミロマー:ドールストンのメッセンジャー。人々に「この世は生まれ変わる、真の世界、神の望まれるような世界が誕生しようとしている。悔い改めなさい、時は近付けり」と伝えて回っている。★★

マーヴィン:心霊新聞『あけぼの』の編集長。

ポルター:有名な小説家。心霊術を信じない。文学クラブでマローンと対立。

ミルウォージー:文学クラブに出入り。心霊現象について著したクロフォード博士の著書に興味があるが読む時間がない、という。

オーグルビー夫妻:ロンドンで心霊術研究所を運営。リンデンによる交霊会を開く。△

アルジャノン・メイリー:心霊術研究家。宗教改革者。★★

メイリー夫人:その妻。

スマイリー:心霊術信者。音楽家。

トム・リンデン:ロンドンのプロの霊媒師。★

メアリー・リンデン:その妻。

サイラス・リンデン:元ボクサー、トムの弟。ごろつき。ボールドンズ・コート。

パトリック・マーフィー警部:バードリー・スクウェア署の警部。婦人警官2名を使ってリンデンの交霊を調査し裁判にかける。

サマウェイ・ジョーンズ:リンデンの弁護士。

チャールズ・メイソン師:英国教会の教区牧師。ロクストンの家にいた。★★

ベルチェインバー:ドライフォントの家のオーナー。

ルパート・トレメイン:ベルチェインバーの貸家で自殺した人物。夜、貸家に霊として現れるという。

ジョン・ターベイン:ビクトリア駅の赤帽。霊媒師。

セアラ・リンデン:サイラスの後妻。児童虐待。

ウィリー・リンデン:サイラスの長男。10歳くらい。前妻の息子。靈感がある。

マージェリー・リンデン:サイラスの長女。7,8歳くらい。前妻の娘

。

エイミー・リンデン:サイラスの亡くなった前妻。
レベッカ・レヴィー:サイラス・リンデン家の隣に住むユダヤ人女性。
子育てについてサイラスを説諭する。

ラ・ペエ:黒魔術に手を出した男。
モーピュイ博士:心霊研究所(メタプシシック)。心霊科学の権威。ワ
グラム街。★
パンベック:ガリシア人霊媒師?
ソヴァージ博士:モーピュイの実験室助手。
ビュイソン博士:モーピュイの実験室助手。
フォルト:『マタン』紙の副編集長。
シャルル・リシェ教授:心霊術研究の長老。
グラモン伯爵:額の立派な人物。
フレマリオン:白あごひげの天文学者

ロス・スコットン博士:チャレンジャー教授の若い弟子。動脈硬化症
で死にそうだった。主治医はアトキンソン。
デリシア・フリーマン嬢:心霊術研究の若い女性。スコットンのメ
ッセージを持ってチャレンジャーの所へ来る。
フェルキン博士:有名な外科医ジョン・アバニーシーに師事したが中
年で死んだ。スコットンを助ける。
ウルスラ:若い看護婦。フェルキンが憑依。

バンダービー:酒癖が悪い霊媒師。

マッカンドルー:マローンの上司。『ギャゼット』紙の編集長。
ボーモント:『ギャゼット』紙の最高責任者。
コーニーリアス:『ギャゼット』紙の所有者。

<あらすじ>

1926年。
チャレンジャー教授夫人ジェシーもサマリー教授もすでに亡くなっ
ていた。

チャレンジャー教授のひとり娘イーニッドとマローンは共同で毎週
教会巡りをして『ギャゼット』紙に記事を載せ、今回”たわごと教
会”とも呼ばれる心霊教会の取材も始めた。

チャレンジャー教授は「心霊術など馬鹿げている、何か出て来たら
自分が科学的に確かめる！」という。

交霊会でデップズ夫人は舞台の上から「故サマリー教授がチャレ
ンジャー教授によろしくとっている」という。

オーグルビー夫妻の心霊術研究所でトム・リンデンの交霊会が催される。

安楽椅子が円に並べられて出席者たちが座り、キャビネットとカーテンが設置されて真っ暗な中に赤いランプが灯される。霊の力を強めるためと称して？蓄音機で音楽が流される。

すると心霊体たちが順にキャビネットの方から現れる。

マローンは何人目かに出て来た心霊体を自分の母親と思う。

霊媒師トム・リンデンの弟サイラス・リンデンは失業して兄から金をせびっていたが、自分も霊媒師になる、心霊術のカラクリを教えろと兄に迫るがトムは追い出す。

マーフィー警部の指示で婦人警官ふたりがトム・リンデンを訪ね、不幸な母娘のフリをしてリンデンがエセ霊媒師である言質を取る。トムは裁判にかけられ、2ヶ月の重労働を言い渡される。

マッカードル編集長はいい記事を作るために、マローンにアフリカから帰国したロクストン卿といっしょに幽霊をおびき出すように提案する。

2人はロクストンの家を訪問していたメイソン牧師を伴って、ドーセットシャー州ドライフォントの幽霊屋敷を訪問する。

3人は屋敷の二階で謎の悪魔のようなものと遭遇しランプやロウソクを点けたまま屋敷から飛び出す。

メイソン牧師だけ戻ってなぜか玄関に鍵をかけて悪霊と話し、これを「鎮めた、もう出て来ない」と2人に説明する。

メイリーの家。

メイリーはマローン、ロクストン卿3人でインチキ霊媒師を始めたサイラス・リンデンを呼び出し、今度イカサマ霊媒をしたら犯罪と見なしていいという誓約書にサインをさせる。

その後、メイリーの家での『救済サークル』にマローン、ロクストン卿も参加する。

メイソン牧師も来て、ビクトリア駅で仕事をしている赤帽のジョン・ターベイン氏が来て霊媒師となると、チャンという中国人の霊が来て、迷える霊を順番に呼び込む。

彼らに死んだことを知らせて地上のことは忘れて前を向くように説得するのが救済だった。

精神病患者、ホーキンと名前を呼びながらノコギリを持って来るように喘ぐ霊、水夫、社交界の女性…。

そしてその日、新聞記事に火事のニュースがあり、ビールという男がホーキンに助けを求めながら梁の下敷きになって焼け死んだということが分かった。

サイラス・リンデンが家に帰って来ると隣人のレベッカから子供たちの面倒をちゃんと見るようにと責められる。

後妻に逆らった10歳の長男をの頭に熱い木炭を押し付けて折檻して、騒ぎを聞いて助けに来た隣人レベッカを叩き出し、長男と長女が二階の部屋に逃げ込むとサイラスは仕事(ボクシングのスーパーリングの相手?)に出かけて行く。

長男のウィリーは自分たちの亡くなった母親が迎えに来たと言って妹といっしょに街中に出て辿り着いたのは伯父トム・リンデンの家だった。

その晩、酔っ払ったサイラスは帰途、醸造工場で転落死した。

パリ・ワグラム街。

モーピュイ博士の心霊研究所に、メイリー、マローン、ロクストン卿の3人が訪問する。

ガリシア人の霊媒に対して行なう実験を見せてもらうことになっていた。

そこでは交霊会の部屋に鍵を掛けてやはり部屋を薄暗くし心霊体を実体化させリアルに動くのを確認したり写真を撮影していた。

参加者は猛禽やピテカントロプスが出て来るのを確認する。

さらに実体化した老人の心霊体にパラフィン溶液に手をつけてもらい型を取るのに成功する。

チャレンジャー教授は娘イーニッド、マローンも最近心霊術を信じ始めて機嫌が悪かった。

イカサマ事例を例に挙げて激しく攻撃していたが、ついに本人曰く「オリンポスの頂から降りて」心霊研究者たちと対峙することにする。

すなわちクインズ・ホールで集会を開き心霊術者たちを激しく非難した。

それに対して心霊術研究家のジェームズ・スミスは以下の点を挙げて反論した。

①チャレンジャー教授が挙げた事例はイカサマばかり。どの世界にもイカサマはある。

②ドイツの科学研究者たちは心霊現象を認める証言をした。

③教授は学問全般についての権威かもしれないが心霊研究については実は何もご存知ない、研究書を読んだこともない。

④心霊体を今すぐここへ出せというが、心霊体は光で溶けてしまうのである。

⑤未解決のペカム・ライ殺人事件を解決せよと仰せだが天使の世界がロンドン警視庁に属するというのか。

これを聞いてチャレンジャー教授は爆発して暴れ出したので会合は閉会となった。

マローンはイーニッドと「結婚させてくれ」とチャレンジャー教授にいう。

教授は「心霊術信仰を認めないなら許可する」と言うが、マローンは「今はダメだが自身を悩ます問題に対してはまだまだ教授のご指導が必要です、実験の準備が整ったら先生にも出席をお願いします」と器用な事を言ってひとまずかわす。教授はとりあえず6ヶ月はイーニッドとの交際を止めるようにいう。

チャレンジャー教授の弟子ロス・スコットン博士が動脈硬化症でアトキンソン医師に診てもらっていたが死にそうだった。デリシア・フリーマン嬢がスコットンからメッセージを持って突然来るが、フェルキン博士という人に診てもらって回復傾向にあるという。行ってみると若い看護婦が男の声を出してスコットンにマッサージの施術を施していた。どうやら故人で医者だったフェルキン博士が彼女に憑依してスコットン博士を治療していたということだった。

3人の心霊研究者たちは心霊運動の方向性について議論する。

ジェームズ・スミス:一神論派。

チャールズ・メイソン:三位一体派。霊魂の交わりを認めつつ旧来の教会の教えを守る。

アルジャン・メイリー:中立。

マローン、メイリー、イーニッドはトム・リンデンに霊媒をやってもらうことにして、ついにチャレンジャー教授をホーランドパークの心霊研究所に連れ出した。

デリシア・フリーマン、心霊大学のオーグルビー夫妻、ボルソバー夫妻、牧師のチャールズ・メイソン、ロクストン卿、大柄なスコットランド系の若者ニコルも参加した。

交霊会でチャレンジャー教授は白い心霊体なるものが出て来るとニコルに捕まえさせ、自身は部屋の電気を点けた。

果たしてトム・リンデンがニコルによって床に落とされていた。

チャレンジャーは「ついに心霊術の正体をあばいた、裁判にかける」と言うがメイリーは霊媒師は「黒い服を着ていてこの部屋に白い物無い」と抗議する。

教授は勝ち誇って帰ろうとするが、イーニッドが催眠状態にかかり、トムの先達ビクターが憑依してチャレンジャー教授の亡妻からのメッセージとチャレンジャーのかつての2人の患者のメッセージを伝えると教授は急に力が抜ける。

患者はチャレンジャー教授が医師をしていた時に微量の新薬(チョウセンアサガオから抽出)を投与した翌日死んでいたのだ。

患者の霊は「自分たちの死因は肺炎だった」といい、チャレンジャー教授はホッとす。

チャレンジャー教授は『ギャゼット』紙を退職したマローンに自身の特許管理を任せる。

自身は物質主義から心霊信仰に回心していく。

マローンとイーニッドは結婚する。

2人はミロマーの言っていた「新しい、真の世界の誕生が訪れようとしている」という言葉の意味を考える。「あらゆる破壊が起きて、すべてが平和と栄光に終わる」。

2人は「真の愛情を持ったふたつの魂はあらゆる天体を絶え間なくずんずん進んで行くということだ。だからきみやぼくは死にしる、生と死のもたらすものにしろ、恐れる必要などあるだろうか？」とあって微笑む。

<メモ>

☒☒年代と年齢の整合性

イーニッドの年齢に矛盾がある。

本作は1926年の設定である。

一方、年譜によれば、1919年にチャレンジャー教授の妻ジェシーはインフルエンザ(スペイン風邪?)で死去。

(前作『毒ガス帯』は1915年の設定だった。娘のイーニッドは毒ガス騒ぎの時には赤ちゃんとしても登場していない。毒ガス騒ぎの直後に産まれたとしても、イーニッドは本作の1926年には11歳に過ぎない。)

また1925年にサマリー教授も死去していた。(推定年齢81歳?)

☒☒ことば

メイリー「わたしはただ真実を告げ、どうしてそれが真実であるとわたしたちが知っているかを語るだけなんです。それを自分のものにしようとしまいと彼らの自由なんです。」

メイリー、科学が進歩でなくて退歩したと述べる理由

「重要なのはどれほど速く進むかではなくて、旅の目的がなにかということです。

問題なのはメッセージの送り方ではなくて、その価値なのです。

進歩という言葉を使っているかぎり、われわれにそれを真の進歩と混同し、神がこの世に我々を遣わされた目的を果たしていると信じ込んでしまう。

その目的とは生命の次の段階に対して備えをすることです。

老齢に及んで、もっと善良な人間になること、もっと利己心を捨て、もっと心を広く持ち、もっと穏健で寛大に…そうしたことが我々の目標なんです。

つまりこの世は魂の工場なんです、粗悪品しか生産していないんですよ。」

トム・リンデン「金持ちは霊媒師に心の慰めを受けたにも関わらず、彼らが貧民窟で老衰するのをほったらかしにする。新聞は霊媒が儲ける金のことばかり書き立てる。」

トム・リンデン夫人「そのうちにみんな同じになって仕事相応の支払いを受けるようになるわよ。」

世俗的な女の霊「毎週日曜日は教会の礼拝に出席していましたわ」
メイリー「問題となるのは内面的な生活です。あなたは物質的な人間でした。」

善意を持って来るものは何事も取り入れ、それがあなたを清めると
思いなさい。」

支配霊チャン「困った人だ！利己的な女だ！快樂を求めて生き、自分を取り巻くものには厳しく当たるんだ。」

ボーモント～『ギャゼット』紙の最高責任者→心霊術に傾倒した社員マローン。

「大衆を宗教の教義について導くようなそぶりなどしてはいかんよ」

☒☒英訳・意訳・異訳

たわごと:Tommy-rot

☒☒心霊術用語

交霊会:セアンス

心霊術信者: Spiritualists

求道者: Believer

先達: ガイド

支配霊: コントロール

より高い心霊

心霊体: エクトプラズム～光に当たると溶ける。。。。(!?☒)

騒がしい精: ポルターガイスト

動物磁気作用: アニマル・マグネティズム

死後の世界/天界: 7つの天体がある。死んですぐの霊は地球に一番近い天体、キリストなどは7つ目の天体。

透視力: ヴィジョン。

心霊研究所: メタピシシク。

物活説: アニミズム～むかしは雷鳴や暴風雨の現象の原因が分からずその背後に善意や知性が存在すると考えた。そこに自然とアニミズムが生まれた。今は科学的に判明している。

一神論派: ユニテリアン。

三位一体派: トリニターリアン。

物質主義者: Materialist (→Substance ideologist)

☒☒心霊術に関心を持った著名な科学者たち

サー・オリヴァー・ロッジ(イギリスの物理学者)

サー・ウィリアム・クルックス(イギリスの物理学者、化学者)

ウィリアム・バレット卿

ロンブローゾウ(イタリアの精神病理学者)

リシェイ(フランスの生理学者)

アルフレッド・ラッセル・ウォレス:イギリスの博物学者。バンダ海峡の動物学、マレー群島の昆虫類。

☒☒1ギニー=21シリング(約1,500円-1971年)~医師、弁護士、探偵などの謝礼に使う。

☒☒ペカム・ライ殺人事件~Peckham Rye murder

チャレンジャーはこの事件の被害者の霊を呼んで誰が犯人か教えてもらうように霊媒師に迫った。

☒☒ディケンズ『骨董屋』

☒☒天才と気質

ポウ:大酒飲み

コールリッジ:アヘン常用者

バイロン:放蕩者

ヴェルレーヌ:墮落者

☒☒解説

パール・バック女史やオールダス・ハックスレーは心霊研究を否定。

サマセット・モームと比べるとドイルのイマジネーションの及ぶ領域の広さには感嘆するばかり。

ドイル『わが思い出と冒険』の最後の章は「心霊の探求」。心霊術啓示。

1917年58歳から世界各地を講演して回ったが心霊術の伝道みたいなものだった。

ドイルは本気だった。